

# 籠祇王

ワキ 粉川の何某

シテ 白拍子祇王

ツレ 祇王従者

ヲカシ 粉川従者

尉 祇王父

地は 紀伊粉河

季は 春三月

ワキ

「是は紀州粉河の何がしにて候。さても此隣郷に。

林の何がしと口論し。敵味方に討ち討たるゝ事數を知らず。分捕少々生捕の人数も候。其中に未だ若き者を一人召し捕り籠者させ。此処の地下人に預け番を据ゑ置きて候ふ処に。何とかしたりけん。過ぎし夜のがして候。口惜しさ申すばかりなく候。自然籠守頼まれて落す事もや有るべきと存じ。其時の番の者を籠者させて候ふ間。番の事かたく申し付けばやと存じ候。如何に誰がある。籠番よくく仕り候へ。又囚人のゆかりなどゝて來り候ふとも。対面は堅く禁制にてある間。其分心得候へ。

「旅だつ空のあさまよい。く。紀の路にいざや急がん。

シテツレ次第

シテサシ  
「是は此程都に住む。祇王と申す女にて候。我遊女の道をたしなみ。色香にうつる花鳥の。声の綾織

る旗薄の。いと珍らかに初月の。雲井にも名を残す身の。花の都の住居かな。

「又此程清水に籠りて候へば。鄙の住居に年よりたる父を持ちて候ふが。何事の科やらん。所の主より召こめられ。籠者とやらん聞え候ふ程に。余りの事の悲しさに。老の親とてさなきだに。別れの近き世の中に。如何なる罪にか沈み給はん。急ぎ下りて今一目。見参らせばやと思ひつゝ。

カール  
「春の霞と立ち出でゝ。都の月の夜深きに。淀の舟戸に出でにけり。」

上歌  
「散りにし花の山風の。」鶴殿の蘆の露わけて。

旅衣。禁野の雪をたどり行く。交野の御野の桜狩。

雨は降りきぬ同じくは。ぬるとも陰に宿らん。ぬるゝとも陰にやどらん。月住吉の西の海。はるかに見えて沖つ波。互にかかる夕雲の。和泉の国に着きしかば。信田の森の葛の葉も。まだ下萌は春

詞

草の。野山を分けて紀の国や。粉河の里に着きに  
けり。く。

シテ「急ぎ候ふ程に。是は早粉河の里に着きて候。父御  
のありかを尋ねて御入り候へ。

ツレ「心得申して候。如何に此内へ案内申し候。

ヲカシ「シカく。

ツレ「さん候是に渡り候ふ御方は。都に住む祇王と申す  
人にて御入り候ふが。籠者の人のためには御子に  
て候ふが。父御に今一度御対面ありたきとて。是  
まで遙々御下り候ふ間。恐れながらそと引合せて  
給はり候へ。

ヲカシ「シカく。

ツレ「仰はさる御事にて候へども。女の事にて候ふ程に。  
御心得を以て御引合せ候ひて給はり候へ。

ヲカシ「シカく。

ツレ「心得申して候。

ヲカシ  
「シカく。

ワキ 「惣じて囚人のゆかりの者とて來りたる者に。対面は堅く禁制にて候ふに。何とて其由申し候はぬぞ。

ヲカシ  
「シカく。

ワキ 「其儀ならば。先づ某対面せうずるにて候。某に對

面と仰せ候ふ人は何くに渡り候ふぞ。

シテ 「恥かしながらわらはにて候。

ワキ 「さては御身にて御座候ふか。惣じて囚人のゆかり

などゝて参りたる者を。籠者の者にも。又某にも  
対面の事は堅く禁制にて候へども。祇王御前の御  
事は。天下にかくれもなき舞の上手にて候ふ程に。  
舞を舞うて御見せ候はゞ。大法を破つて父御に引  
合せ申さうするにて候ふ間。舞をまうて御見せ候  
へ。

シテ 「何とわらはに舞をまへと仰せ候ふか。

ワキ 「中々の事。

シテ

「悲しやな親子の契りの対面なるを。舞はじ申さば父に逢ふ事かなふまじければ。仰には従ふべけれども。先づく父に引合せて給はらば。其後舞を舞はうずるにて候。

ワキ 「尤ことわりにて候。さあらばまづく引合せ申さうする間。其後舞をまうて御見せ候へ。如何に誰かある。

ワキ 「さあらば此人を籠者的人に引合せ申し候へ。

尉 「籠鳥雲を恋ひ帰雁友を失ふ心。それは鳥類にこそ聞きしか。人間に於てかくばかり。故郷を去り友を忍びて。身にかぎるかの浮世の中。たゞ前生の因果を思ふのみなり。南無や大慈大悲の觀世音。福寿海無量の誓ひのまゝに。善所に迎へ取り給へ。

シテ 「如何に父御前。祇王こそ是まで参りて候へ。まづ御有様を見奉れば。言の葉よりも涙先だち。更に心も心ならぬぞや。あら浅ましや候。

尉

「あら不思議や。御身は何とて是までは來りたるぞ。

シテ

「さん候父御の御祈りのために。此程清水にこもリて候へば。何事やらん父御前は科人となりて。籠者とやらん聞え候ふ程に。かちはだしにて是まで参りて候。さて御科は如何なる事にて候ふぞ。

尉  
「此年になりて何事の科をなし。かく籠者するぞと思ひ給ふはことわりなれども。是は人の命にかはりたる事にて候。

シテ

「さらば委しく御物語り候へ。

尉

「さても当国に合戦あつて。敵味方に討たるゝ事數を知らず。又生捕の人数も少々ありし中に。年若き侍を此籠に入れおかれ。いまだ陣中の事にて有りし程に。此所の地下人に預け番をすゑ。籠を守らせらるゝ所に。此尉が番に当りし時。彼人をよ／＼見れば。いまだ眼前の若き人なるが。然も此たびの叛人にもあらず。よそよりの合力の人

シテ  
数なり。其時我おもふやう。あら痛はしや人の上に思ふだにも痛はしく。さこそ親親類の嘆き給ふらんとよくく思へば。人を助けば菩薩の行ひ。たとひ此人を失ひたる科により。死罪には行はるゝとも。助けばやと思ふ一念骨髓に通つて。或夜この籠をひらき。彼者を落す。されば囚人を失ひたる科のがれがたくて。やがて此尉を切らるべきに定まりしが。まづく籠に入れおかれ。もし囚人のゆくへや聞くとて。今まで切られねども。今は早切らるべきに定まりて。今日の夕べと聞え候ふ処に。嬉しくも來り給ふ物かな。跡の取りおき最期の仕儀といひ。あまりにたよりもなかりつるに。御身の來り給ふを見て。二世安樂の心まで出で来て候へ。さりながら不覺の涙のこぼれ候。「さては人を助け給ひたる御科ならば。かへつて喜びにやなるべし。慈眼視衆生の力を頼み。觀音を

尉  
念じ給ふべし。

「げにく是はさる事なれども。今は命も惜しからず。たゞ願はしきは後世菩提。

シテ  
「げにく是も御身のためには。御ことわりとは思へども。我ばかりなる親子の中。

尉  
「此一世こそ限りなるを。

シテ  
「此世をだにも添ひ果てもせで。

尉  
「せめては生老病死の内。

尉

シテ  
「病苦をも受けず。

地  
「死をも待たで。

二入  
「剣の先にかゝらん事。前世に誰をか害しけるぞや。

地  
「のがれえぬ。報いを我に老の身の。く。又此後  
は誰が世の。親子となりて生るべき。是につけて  
も只今の。親と子の。一世の縁ぞ限りなる。さり  
とては我たのむ。大慈大悲の觀世音。後の世助け  
おはしませ。く。

ワキ 「如何に祇王御前舞を御まひ候へ。

シテ

「さん候父の御ありさまを見るに。涙にかきくれて更に舞ふべき便りなし。然るべくは御ゆるし候へ。

ワキ 「不思議なる事を仰せ候ふ物かな。さては我等を御たばかり候な。

尉 「如何に祇王。何事を申すぞ。

ワキ 「いや聞き給へ。是なる女性の名をば祇王と申し候ふが。尉殿のためには息女と御名乗り候ひて。囚

人に対面ありたきよし仰せられし程に。対面の事は堅き禁制にて候へども。承り及びたる一曲一かなでも見申してあらば。大法を破り囚人に対面させ申すべきよし申して候へば。さらば対面有つて後。舞を舞はうずるよし仰せられ候ひて。今は舞ふまじき由仰せ候ふ程に。皆々腹立仕り候。

尉 「尤御ことわりにて候。如何に祇王何とて辞し申すぞ。本より此一曲はさる方よりも密かに伝へたり

しを。御身に相伝したる事なれば。父が最期の光  
陰にも。歌舞の菩薩の妙音たるべし。はやく歌  
ひ給ふべし。

シテ「此上はとかく申すによしそなき。歌はずは身の科  
といひ。又は父御の仰せなれば。涙をおさへ心を  
沈めて。

尉「父も昔を思出の。涙ながらに拍子をすゝめ。

シテ「曲をいたして呂律の一つの。

尉「悲しみの声を便りとして。

シテ「是ぞかぎりの親子の中。

尉「名残を見せて。

シテ「花の袖。

地「雪をめぐらす袂より。く。涙の雨やまさるらん。

シテ「何事も世の有様は夢なれや。

地「うつゝなき今のがしきかな。

尉「げにや遂にゆく道とはかねて知りながら。

シテ 「昨日今日とは白雲の。

尉 「朝に立ちて。

シテ 「夕に消ゆる。

地 「電光朝露の。影の内外に遊ぶかな。胡蝶の舞の花の袖。あはれなる心もて。花にと歌ひかなでん。げにや世の中に。独どまるものあらば。もし我かはと身をや頼まんと。げにことわりや我ながら。只今別るべき。たらちをの亡き跡に。残らんまつ間の花ざかり。

シテ 「いつまでか長柄の橋のながらへて。

地 「かかる浮世を渡らんと。思ふにつけても。恨めしきは命なり。げにや世に住むは。うきこそまさ三吉野の。岩の崖道。ふみならし行く水の。あはれくなる。父の事ぞ悲しき。つらく無常を觀

するに。飛花落葉の秋の風。風月延年の遊樂も。  
狂言綺語のいつてん。讚仏乗の因縁まで。津の国  
の難波の事か法ならぬ。遊び戯れかずくの。

シテ  
「声仏事をなしてこそ。

地  
「父のゆくべき終の道の。くらき暗をもともし火の。

光のかげもあきらけき。真如安樂のかの国に。迎  
へ給へとさながらに。歌舞の菩薩の光臨と。懇ろ  
に念願し。是までなれや今は早。烏帽子直垂ぬぎ  
き居たり。又さめぐと泣きるたり。

シテ  
「あら悲しやみづからを失ひて。父御を助けてたび  
給へ。

ワキ  
「是は不思議なる事を仰せ候ふ物かな。たとひ男子  
の身なりとも。人の命にかはる事あるべからず。  
しかも女性の御身にて。思ひもよらぬ事にて候。  
尉  
「如何に祇王。何を歎くぞ。今は歎をとめて。父

が最期の十念をすゝむべきを。悲しむ事あるべからず。是なる数珠は黒谷の。法然上人より給はりたる御数珠なり。是をおことに与ふるなり。父が形見と思はん時。念佛申し跡を弔ひて得させ候へ。

シテ「さん候此御数珠にて念佛申し。御跡とむらひ参らせ候ふべし。又是なる御経は。此程父の御ために。

身を離さずよみたる御経なり。種々諸悪趣の誓ひのまゝに。必ず成仏なり給はゞ。同じ蓮台に参りあふべしと。

二人「数珠と御経をとりちがへ。南無や大悲の觀世音。慈悲の眼の光にて。臨終を守り給へや。

ワキ「あまりに時刻もうつりゆけば。かの老人の首討たんと。太刀ふりあぐればこは如何に。御経の光眼にふさがり。取り落したる太刀を見れば。二つになりて段々となる。こはそも如何なる事やらん。

二人「父も祇王も之を見て。命終らん事をも分ず。たゞ

茫然とあきれ居たり。

ワキ 「いや／＼何を疑ひ給ふ。只今読誦の御経の文は。

取り分け念彼の段。取り上げ見れば疑ひなく。

二人 「或遭王難苦。

ワキ 「臨刑欲寿終。

二人 「念彼觀音力。

ワキ 「刀尋。

二人 「段々壞。

地 「げに有難や此文は。王難に逢ふとても。剣段々に

折れなんの。経文は疑はず。あら有難の御経や。

キリ 「此上は老人よ。く。はや助くるぞ帰れとの。御

ゆるされにあづかれば。祇王は父を引き立てゝ。悦びの道に帰りけり。げに頼みても頼むべきは。

是れ觀音の誓ひかな。く。